



# 多 林 蘇 岐

- 研究調査
- 木曾谷産魚類に就て
- 試験苗圃經過報告
- 隨筆
- 駒場から
- 目茶苦茶録
- 創立二十周年記念會記事
- 更殖戰記
- 文苑
- ありふれな
- 葉報
- 吊慰金募集
- 記念事業贈金申込報告
- 島内先生謝恩金
- 會員動靜
- 林友代領収報告

日四十月六年四十四治明 (日四十月六年四十四治明) 可認物便郵種三第 日五廿月一年十正大 號四十四百第

## 木曾谷産魚類に就て(其二)

菊池生

十月東京理科大學の田中茂穂先生。來校福島附近の魚族を調査されました私は先生に學校の標本をお目にかけて上で特に林友の爲めに次の一篇を書いて頂く事にしました。森林と魚類、堰堤と漁業等のみ好問題に就ては遺憾乍ら詳しい事は聞き漏しました。十六日の二十週年記念の祝賀會に先生をお招待申し上げたら大層喜ばれて諸兄に宜く申傳へて下さる様にこの事でしたから私が代はつて本紙上にて御禮申し述べます

猶本編は學校の小貫先生、熊崎氏福島町の棚橋氏、加藤氏征矢野氏、三岳村の小林氏の厚意による所多く深く感謝の意を表する次第であります

十月三十日東京日日新聞の信州版に魚類分布の研究に好都合な木曾福島地方と云ふ題で田中先生の御話が載つて居ますから参考にされたい  
黒川及び福島附近にて採集せる魚類に就て田中先生の査定に依れば次の如し

- 硬骨魚類
- 硬 鮭科 マス、タナピラ、シママ
  - イハナ(アユの種本なし)
  - 鯉科 コヒ、フナ、ドウゼン、アカウヲ、ヤナギバイ
  - 泥鰌科 ドヂヤウ、アジメ
  - 硬鰭目

- 鰻科 カジカ
- 沙魚科 ハツタイカジカ
- 無足目
- 鰻科 ウナギ

附 圓口類八眼目(スナヤツメ奈良井川に産する由なれど未だ實物を見ず)  
田中先生の御話を次に掲ぐ。  
凡そ淡水魚に水量の多い所程種類も多く大ききも大きいものであるから我國では琵琶湖に居る魚族は一番種類が多い併し他の地方に居て琵琶湖に居らないものも尠なくはない。この木曾の如き川の上流では水量も少ないし又水温の低い所であるから種類も割合に少ないのは止むを得ない。  
扱て此地方でなければ見る事の出来ぬ者として美味な者が斯の如き山間部に在るので交通不便の土地の研究は意外に必要な事がある又一体に山間部は將來とても遽に交通の便が増進するものとも思はれない。假令木曾が將來比較的交通便利な所になるとしても他の類似の土地はながく急に交通の不便利が滅縮するものとは思はれない斯の如き地方に於て營養をとるのは鳥獸の肉を除いては魚肉によるの外がなき故何れの方面より見ても魚類の研究は山間部に於てするの肝要な事である。  
今標本に就て見渡すと凡そ次ぎの如き者が福島附近に於て見る事が出来る先づ尤も大事なもの  
タナピラとイハナである。両者は鮭科に屬



し美味と比較的多く採れると言ふ点を以て重要なものである。此魚は川下にては到底見る事の出来ぬのである故毒液を流し或は爆烈薬を以て一時に之を撻らぬやうにし少しづつ魚を漁獲する事が肝要である。又是等のものは産卵期には多数群集して同時に多量にとられる性質のもの故教育のある人はかういふ点に留意しある数量以上はとらぬ事の注意を要する種々の人より聞く所に依ればタナビラは雌の多いものと云ふ故産卵期には雄の方を多くとつて雌を逃がしてやることも將來は必要となるであらう。殊にタナビラは福島附近にてはイハナよりも稍々多量にあり美味の点に於ても勝るが故に學術上並に應用の方面より保護する必要がある。木曾の附近には小生の考ではアユも居ると思ふが實際には居らぬと云ふ故益々このタナビラを保護して増殖せしむる事を考へなければならぬ。タナビラに似て之と違ふと思はれるものにシヤマがある。是はマスの子であるかもしれぬが今少し研究しなければ断言は出来かねる。

イハナは大抵の所ではイハナと云ふが岐阜の或る北方ではキリと呼ぶさうだが其後の調査によれば全く不明に陥つて居る。キリとは云はぬらしい。従つて將來の調査を要する、タナビラは箱根附近ではヤマ、東京附近ではヤモメといふ、東京でヤマと稱するのは味の悪い別種のもの乃ちオヒカワの事である、然るに菊池氏の話では岩

の花巻あたりではヤマをヤマベといふ故注意を要する、其外この魚はアミノウツ、アメゴとも云はれる、中國の西部ではヒラメ或はヒラベとも云ひ九州ではエムハと云ふ。次に鯉科の類にはアカウラドウゼン及びヤナギバイがある、ドウゼンは普通にカマヅカと云ふ、又スナモグリとも云はれる、これは砂にもぐる性質がある為であらう、四國ではアナガラとて随分美味いものは他に味の良いの乃ちアカウラが澤山あるので之に聲價を奪はれるからであらう。

アカウラはウグヒオウガヒといふのが普通で東北地方ではクキ、四國九州中國ではエタといふ此魚は川下に居るものと川上に居るものとは或は種類が違うものかも知れぬ是に就ては二回程東京附近に出張して調べたが今以て断案を下す事が難しい、乃ち一に川のみ居ると稱せられて美味い方で且産卵期が早い、然るに他の物は海から潮るもので産卵期が遅い、福島附近にても川に溯つてくるものが大きいと云ふのは研究上に何等かの暗示を與へるものであると思ふヤナギバイの事をば再々アブラハヤ飛驒ではアブメ中國ではドロバイと云ふ、是は不味いものといふけれど土地によつては稍々美味いもの、中に列せられて居る。鯉科には海に居るものと川に居るものとで著しく種類を異にする等兩者を産する所

は一方を海カシカ他方を川ノシカとも云ふ此地方に見るカシカは非常にうまいもので加賀金澤の名産ゴリと稱するものと同様である。

泥鰌科ではドチャウとアジメが居る、アジメはシマドチャウと稱する方では是には二種あるらしい、ドチャウは多くの人が食べて居るがアジメの方は普通に食べられては居ないものであるが山間部で多くとつて相當の美味を感ずるのは餘程面白い、恐らく川下では食ひたいと思つても多く得られぬ或地方では有毒だとして食はぬ所もある、是に中毒した事がないなら大に食ふ事を推奨する。

沙魚科の類にも海産と淡水産とあり、種類も多いものであるがこの地方にはスヒツキカシカがある、此魚は吸ひつく事が出来る一寸似てる様だが餘程遠つたものである。沙魚の類は食用とするものが多いがこのスヒツキカシカを食用とする所はまだ小生は知らぬ、次に

鯉科の類にはナマツ、ギサスリの三つは普通に見られるものだ、下流にはナマツが居りサスリは何處でも上流に産するものである、此原則にはづれないで此地方でもサスリが居る、此魚には種々の名があるが小生等はアカザと云ふ背と胸の鰭で人を刺す鯉科のウナギは如何なる險しい所でも又水のない所でも洪雨の時等を利用して上つて

行くから如何なる山間部にて居る事が出来る上流産のものより下流のものが美味いとなつて居るが山間部の人々は土地のものが宜しいと云ふから將來公平に比べて見る必要がある、誰も知つて居る何處にも居るものにメダカがある、これはメダカ科に屬するものである、この地方に見當らぬのは水流が激しく、花崗岩から出来て居る水底が美しくて已れの食量にするもの、ないためとも思はれる。

西筑摩郡誌(八十一頁)にある魚類の個所に誤を一二訂正する

鯉科に屬するものに淀鯉とあれどこれは何類をさすや飛驒の所謂川鯉を指すならばミゴヒの事である。ドウゼンを諸子魚として居るけれども是は前述の如く訂正を要する。鹹とヤナギ鮓を石班魚科として居るが科に入るべきものである猶鰭をも擧げて居るが電燈會社の堰堤の爲めに潮れぬ事が事實らしいそれがなければ潮り得る故「但し」書きを附して編入して置いたらどうか。

大凡魚を調べるには材料がなくては叶はぬ事だ。さし當つて各地の標本を多く集めねばならぬ。それには珍らしい魚には「珍」と附箋をつけて貰ひたい。珍らしいとは其土地での事で他の地方では格別珍らしくないものもあり又其土地で普通の魚であつても他の地方に持つて行けば珍奇なものとして尊重される場合もある。採つた魚は薬品屋で賣つて居る。ホルマリンを十倍計りの水

加へ漬ける。一度漬けた標本は液が濁つても取り換へる必要がない。取り代へた爲めに斑点がなくなつたり形が變つたりして却つて困る來になり研究の手係りを失ふ事もある。それから魚をば各地の方言に依つて調べて其上、産卵期、棲んで居る場所、性質、味漁法等も調べてほしい。博物の教授には標本と圖書による所が多い。併し物によると比較的効力の少ない事もある。この時に其土地の方言が極めて必要になつて來る。方言で教へると生徒の印象が深くなる。この点に於て方言の調査は極めて肝要である。標本を送るにはホルマリン漬お乾燥せぬやうに脱脂綿を少し濡らして送らねば小生の研究は未だ／＼ホンの緒で到底諸君に教へるところまでは行かぬ。この故に演説や講演は御免を蒙る。是はキザに高振つて言ふのではない、但し研究不備でも六十以上になつたら演説でも講演でもするよハ、

試験苗圃經過報告

尾 花

美しかつた木曾の山々も近しく秋と共に次第に寂びれて落葉の霜が朝な朝な深くなつた播種苗圃の苗木も全部掘り取られて杉の移植苗すら假植されの上には霜よけまでしてある、もう今年の苗圃事業も全部終つて冬籠りの用意もすつかり出来今は唯暖かい春の來るを待つばかりとなつた

今春以來西澤先生が熱心に指導監督して居られた第三學年及第二學年の擔當の試験苗圃の結果を西澤先生が御忙がしいために私が代つて報告する事にす。

◎何れの試験も數字上面白い結果は得られなかつたけれど今後年々の試験の結果を平均すれば或は面白い結果を得らる、かも知れぬ。次に肥料試験は勿論の事其他の試験も苗木生長の良否を記入したいと思つたけれど色々關係から記入する事の出来ぬのを頗る遺憾に思ふ。

播種試験(發芽歩合例年ヨリ懸シ)

種子	一坪ニ付播種量發芽率	現在數
ヒノキ	二合	一合一〇% 一、五〇〇
スギ	同	一五% 一、八〇〇
サワラ	同	一〇% 一、四〇〇
アカマツ	一、五合	七勺六五% 四、六〇〇
クヌギ	西澤式 二六〇粒	九三% 一四七本
同	岡田式	八九% 一四一本
同	横播	九三% 一四八本
同	倒播	九六% 一五一本

  

樹種	肥料	年齡	移植本數	枯損本數
クヌギ	堆肥	二年生	九五本	四本
同	豆粕	同	九〇本	五本
同	人糞	同	九〇本	三本
同	磷酸	同	九〇本	二本
同	同	同	九〇本	一本
同	無肥	二年生	九六〇本	三九本
同	同	同	九六〇本	三二本
同	同	同	九六〇本	四九本



樹種	日干時間	年齢	移植本数	枯損本数
油粕同	同	二年生	五三六本	三二八本
油粕同	同	二年生	四二四本	二二一本
油粕同	同	二年生	九一〇本	一二六本
油粕同	同	二年生	四一〇本	一三一本
油粕同	同	二年生	四五〇本	五五本
油粕同	同	二年生	二二八本	七六本
油粕同	同	二年生	二四〇本	一五本
油粕同	同	二年生	二四〇本	一六本
油粕同	同	二年生	二四〇本	一八本
油粕同	同	二年生	七四九本	四七本
油粕同	同	二年生	二五〇本	三本
油粕同	同	二年生	一八〇本	〇本
油粕同	同	二年生	二〇〇本	一本
油粕同	同	二年生	一七六本	四八本
油粕同	同	二年生	二五〇本	三八本

樹種	挿木本数	枯損本数	肥料
ネズコ	一六本	二本	
ビヤクシン	一六本	三本	
ヒノキ	一五本	四本	
スギ	一五本	六本	
カウヤマキ	三五本	六本	
一位	一〇本	四本	
ポプラ	一〇本	二本	
ギンドロ	二〇本	四本	
樹種	挿木本数	枯損本数	肥料
ヒノキ	四〇本	二六本	人糞
サツラ	三〇本	二本	同
ビヤクシン	四五本	一〇本	同
スギ	三〇本	二〇本	同

近年我が林業界は此處數年に非常な進歩發達を遂げたが其任に當る技術者の高等教育を受けんとするもの、數が増加しないのは甚だ遺憾な事である。

苦痛と不安に満ちた受験準備時代から二轉愉快な駒場生活に入つて既に半歳餘。駒場生活のどんなものであるか略味事が出来た。僕の山林校時代には上の學校の内容に規則書に書いてある以外の内容を知りたくて耐らなかつた。現に志して居る諸兄に於ても同様だと思ふ。書くことの至つて下手な僕には到底名文などは書けないが先輩から聞いた事や、僕が直接味つて居る駒場生活を思ひのまゝにボツ／＼書いて見ようと思ふ。

一、我が駒場の強味  
駒場と云へば誰しもすぐに林業を聯想することである。何んと言つても駒場は林業の本源である。故に我が先輩は官界は勿論民間に活躍して覇を唱へて居る本邦は狭しとなして近年海外にまで發展して自覺しい活動を示して居る、現に高農出を凌いで居る事は誰しも見る事である。我が駒場の誇は此處にある旅行なごすると各地で盛んな歓迎會が催される、而して種々便宜を計つて呉れるので何となく肩幅が廣くなり、自然旅行も面白く愉快に終ることが出来る。

二、本科と實科  
本科と實科は別に連絡と言ふものはない。

駒場から S F 生

(但專科には入學が出来る)それで餘り面白くない關係がある現今は互に眺み合ひの姿である、我が實科は附屬なるが爲に種々の不便壓迫があるそれ故自然相反目するのだ。

以前學生の少なかつた時には雙方互に親しみ助け援けられて居た。  
其結果卒業後も非常に好都合で互に最負しあつたものだ度々駒場會を開いては互に親睦を計つた、それが爲に我が先輩も非常に發展し得たのである、現今の好評を得る基を作つたのである、然れども現今はこれと全く反して本科と實科とは確然たる境壁を作られてしまつた、親しむ様な機會もなく又親しもうともしない、誠に歎かましい現象である、同じ巢から出るのだから互に手を取つて行きたいものである。

三、實科の實習  
我が實科は元より技術者養成である故に實習の重大視は當然のことである、實科の實習は主として旅行である、砂防なり測量なり、地質なり植物なり或は經理測樹旅行實習である、それで年に幾度も出張するのでそうして嚴密な監督の下に行はれる、本多博士や、石田諸博士などが手を取つて教へて下さるから面白い不知不識の中に頭に入つてしまふ、それで先輩は實地については何事も困難を感じてゐない學校時代に眞面目でありさへすれば何も赤い顔しなくてよい或る人は常々實習を輕んじて居た爲

進級が出来なかつたと言ふことである (未完)

目茶苦茶錄

飛鳥生

自然に歸れ自然は自由であり慈母であり良教師である。教へたルーソの言葉に相當の真理がある、餘りに反自然的な運動や計畫はどうしても無理が伴ふ、無理がどうれば真理は引込む、かくて自由を失ひ、慈母を失ひ、良教師を失ひ……を失ひ、自個も失ひ……機械的人生觀を真理の全部と誤信して行動するのは實は自らを死地に陥入れる恐れがある、唯物主義一點張も、マルクス陶酔もどつくり思案が肝要である。

◎自分の一尺他人の一寸  
誰でも自分の欠点は大きくても氣がつかず他人の欠点は小さくても氣がつかぬものだ、朝鮮にある米人宣教師が我が國の施政方針に少なからぬ支障を陰に陽に與へて居るは事實であるが、それは別として彼等が檢舉された際に尋問の果が拷問にかけられたことや、鮮人に對する更に殘酷なる拷問を目撃したといつて本國へ報道して、所で自分等の國內ではどうしたものか、彼等が黑人に對する私刑やシッコに於ける虐殺はどうだ、支那人に對する從來の處置はどうだ近頃の日本人に對する態度はどうだ、何が人道だ、何が正義だ、嫌ひなものは

しかじ感情には理由がない、嫌ひなものは

何んといつても嫌ひな事で理屈がないといふことを自分のいつてること、やつてることは正しい理屈をつけて説明しなければ安心しないものだといふことは牢記しなければならぬ。

◎鳥と狐  
美肉を得た鳥君意氣揚々と樹枝にとまつたお腹のすいた狐君樹に下あつて之を仰見た「鳥君、君の聲の美しきを聞くこと久し一歌唄ふて歸らずや一言葉は頗る巧であつた。乘氣にならざるを得ない程度にまで「アア！」一鳴、肉は狐君の口中に入つた、古いイッソブ物語には千古の金言がある、輕く口車に乗つて大事を誤る勿れ、一の運動を試も深恩を要するのである。

◎他山の石  
日本人が世界各國人から憎れるのは第一に傲慢が強いから第一には詐欺をやるからだとは或る米人の言である、彼曰く、有色人種は白色人種に對して非常に謙遜である決して反抗しない、然るに日本人といふ黄色な小僧は何とも癢に觸る例外だ、何かと云ふと二言目にはすぐ戦争で勝つた事を自慢する、白人強國と政治的地位も同等ではないかといふ、日本といふ國家が他國に對してやたらに干渉的攻撃的に出るにも此の傲慢がさせるのであるし、従つて白人は勿論他の東洋人からも毛嫌ひされるのである。彼は更に、日本人が嫌はれる原因は傲慢よ



りも寧ろ嘘つきにあるといつて、日本商業が従来の下層社會の人々の手によつて行はれた事實から、その商業道徳が低級なのは止むを得ぬとしても、立派な紳士が自己の良心を欺ひて平氣で嘘をつくといふ實例を擧げて居る、我々日本人に取りては幾分他山の石とならぬでもあるまい。

◎立ち向ふ人の心は鏡なり  
己が心をうつしてや見む  
己れの短所、缺點は却々判るものでない、他人の短所や缺點は能く眼に映るものだ、

「あ、云ふ事をするから人に笑はれるのだ」と云ふ人それ自身が、同じ様な事を毎日に繰返して居ることは薩張り氣がつかない、人の事を彼此言はれた義理かそれよりも先づ「手許拜見と言ひたいね」と笑つた人が反對に人から笑はれる仕事それでは人の行ひを笑ふ所の沙汰でなく、先づ我が身から矯正して行かねばならないではないか。

歌の通り善きに付け、惡しきに付け、他人の言語動作を直ちに我が身に照し合せて見て、長所は之を取り短所は之を捨て、常に我が心の缺點を補ひ、以て完全な人格を築き上ぐることを努めなければならぬのである。

◎商賣

向鉢巻の威勢の好い魚屋が「え、鯛こい」と、聲張り絞つて町中を賣り歩く、その後から篩屋が、陰氣な聲で

「ふるい〜」胸氣な魚屋はこれ聞いて、怒るまいことか、真赤にむくれ返つて「やい馬鹿にすねね、何が古いんだ、憚り乍ら俺アの鯛アピン〜泳いでらア」「お前さんのことぢや無ねね、ふるいアな俺の稼業だよ」「何にを生意氣なツ」「と忽ち大喧嘩を始めると、其處へ丁度古金屋が差し蒐つて「ね、ふるかね〜」

創立二十週年

記念祝賀會記事

本校創立二十週年記念祝賀會は十月十六日知事代理岡村縣視學の臨場を得左の如く講堂に於て行はれました

- 記念祝賀會次第  
(一)記念式 (午前八時開式)  
一、着席 (敬禮)  
二、君が代 (合唱)  
三、勅語捧讀  
四、校長式辭  
五、知事告辭  
六、來賓祝辭  
七、敬禮  
(二)謝恩式  
一、式辭

二、記念會經過報告  
三、謝狀贈呈  
四、謝辭  
五、敬禮 (閉式)  
(三)記念運動會 (式後直に開始)  
當日朗讀せられました知事告辭は  
告辭  
縣立木曾山林學校創立二十週年記念式ヲ舉行スルニ當リ一言所懐ヲ述フルハ洵ニ欣幸トスル所ナリ  
惟フニ地方産業ノ救道振興ヲ企圖スルノ道固ヨリ一ニシテ足ラスト雖廣大ナル林野ノ面積ヲ有スル本縣ニ在リテハ林業教育ノ普及ヲ圖リ教養アル人材ヲ育成シテ以テ斯業ノ開導ニ當ラシムルハ緊切ノ要事タラスンハアラス

當地方先覺者風ニ茲ニ見ル所アリ明治三十四年郡立ヲ以テ本校ヲ創設シ後程度ヲ高メテ甲種トシ三十九年縣營トナル年所ヲ閱スルコト前後二十年校運年ト共ニ進ミ今ヤ多數ノ卒業生ヲ出シ齊シク本校教養ノ精神ヲ體シ各其學得スル所ヲ以テ林業興隆ノ事ニ從ヒ成績漸ク見ルベキモノアリ是洵ニ關係地方ノ利福タルノミナラス亦實ニ邦家ノ慶幸タラスンハアラス  
今ヤ我帝國ハ更始一新ノ時運ニ際會シ大ニ戰後ノ經綸ヲ策セサルヘカラサルヲ秋ニ方リ實業教育ノ振興革新一日ヲ緩フスヘカラサルモノアリ本校關係者カ創立二十週年ヲ記念セントスル所以ノモノ蓋シ

ト至大ナリ從テ貴校ノ隆盛ヲ期待シ在校生諸子ノ益々精勵努力ト卒業生諸君ノ社會的信用トノ高マリ本場槍ノ名ト共ニ棟梁ノ材愈々多カランコトヲ懷シキ貴校ニ囑望シ敢テ紙上ヲ籍リテ祝意ヲ表ス  
はたせや響も高し木曾の山  
大正十年十月十六日  
長崎縣林務課長 正六位 安藤 時雄

時運ノ趨勢ニ鑑ミ益内容ノ充實ヲ圖リ以テ本校々史ニ一段ノ飛躍ヲ劃セント欲スルノ意圖ニ外ナラサルヘキヲ信ス  
冀クハ職ヲ本校ニ奉スルモノ教養指導其ノ道ヲ盡シ就キテ本校ニ學ブモノ專念一意智徳ノ練磨ニ力メ亦克ク卒業生諸子ト母校トノ精神的連繫ヲ緊密ニシ協心戮力相依リ相率キテ本校々風ノ顯揚ニ力メ以テ本日ノ盛舉ヲ空フセサランコトヲ  
大正十年十月十六日  
長野縣知事 岡田忠彦  
ついで福島町長伊藤淳氏農工支店長千村氏卒業生總代宮下信一氏各一場の演説を試みられ三代校長安藤時雄先生祝辭(代讀)及祝電の披露が左の如く行れました

祝電

大正十年十月十六日木曾ノ天地秋色濃カニシテ錦織ナスノ吉日ヲトシ茲ニ木曾山林學校創立二十週年記念式ヲ舉行セラル、ニ當リ鐵路遠ク日州ノ地ヨリ參列祝意ヲ表スル本志ナルモ公務ノ爲メ其ノ意ヲ得ズ誠ニ遺憾ニ堪ヘズ予曾テ芝シキヲ第三代目校長ニ受ケタルノ因縁ヲ以テ遙ニ此盛舉ヲ祝スルハ誠ニ欣幸トスル所ナリ惟フニ木曾山林學校カ夙ニ時世ノ要求ニ應スヘク人材ヲ養育シ我林業界ノ各種方面ニ雄圖廣ク活躍シ社會ノ信用ヲ博スルニ至リタルハ縣當局者ヲ始メトシ累代ノ職員諸彦ノ熱心ナル經營施設ト卒業生諸君カ緊忍不拔ノ精神ト耐忍持久ノ體力ト

相俟テ縣民否國家ノ興望ニ副ヒタルノ結果ニシテ眞ニ祝賀ノ感ニ堪ヘサルナリ抑モ二十年ノ星霜ハ短キカ如クニシテ長ク或ハ長キカ如クニシテ短シ林木ノ一生ヲ通シテ之ヲ觀ルニ漸ク間伐期ノ利用價値ヲ見出スヘキ初期ニ到達セルニ過キス然カモ創立當時ヨリ幾多ノ變遷アリ浮沈時ニ無ニアラスト雖モ益々順風ニ帆懸ケタル大洋ノ孤舟ノ如ク獨リ日本獨特ノ中等林業教育機關トシテ我山林教育ノ弱者ヲ以テ任スヘキナリ嘗テ長野縣會ハ本校ノ國立移管ノ決議ヲ爲シタルコト數回ニ及ヘルアリト雖モ其ノ未タ昇格ニ至ラサルハ寧ロ予ノ欣幸ト信スル所ナリ何トナレハ今日縣立實業學校ノ多數施設經營中獨リ御嶽ノ秀テタル靈峰ノ如ク或ハ木曾ノ美林ノ天下ニ冠タルト共ニ特殊ノ名實ヲ有スルカ故ナリ 予八年前木曾ヲ去リ長野ニ在リ三十有餘ノ卒業生諸君ト共ニ地方林政ノ運轉ニ任シ一度北海ニ渡リ又々二十有餘名ノ蘇門出身者ト共ニ國有林經營ノ任ニ當リ今ヤ南國ノ地ニ在リ未タ寧々タル感ヲナスト雖モ將來益々發展ノ餘地ヲ存ス師弟異郷ニ會シ或ハ懷舊ノ念ニ耐ヘシテ夜ノ更クヲ忘レ師弟ノ精緒綿々更ニ一層ノ強ミヲ感シ益々蘇門ノ親ミヲ覺ヘタリキ 茲ニ創立二十週年記念式ヲ舉行セラル、ニ當リ貴校ハ漸ク成年期ニ達セルニ過キサレヲ知り我邦ノ林業界ハ前途益々擴大シ之カ人材ヲ要スルコ

春日大町中學校長及島内先教諭外數氏より祝電披露終りて謝恩式に移る岡部校長式辭西澤教諭記念會經過報告あり卒業生總代狩戸深一氏左文の謝狀を別記の人々に贈呈し之に對し宮川丑作先生謝辭安井正夫氏謝辭さりて閉式運動會に移れり  
○感謝狀及び之を受けたる諸先生次の如し  
感謝狀  
元長野縣立木曾山林學校校長教諭書記先生始終一貫永歲刻苦精勵育英ノ爲ニ盡瘁ヲラレタルハ詢ニ感銘ノ至上 生等過去ヲ顧ミ其風未ヲ忍ヒ追隨スルヲ衷心ノ歡喜トシ且光榮トスルモノナリ  
今茲幸ニ周當廿年祝賀ニ際シ謹ミテ記念牌ヲ贈呈シ報本ノ微衷ヲ致シ聊謝意ヲ表明ス  
十月十六日 友會 團  
前校長 (六年三月月) 松田 力熊先生  
全 (四年九月月) 江畑 允先生  
全 (二年三月月) 安藤 時雄先生



全 (八年四月) 七宮 純雄先生  
 前教諭 (十二年九月) 林 重郎先生  
 全 (八年六月) 新家 園面先生  
 全 (八年六月) 島内 庸明先生  
 全 (六年九月) 北村 正夫先生  
 全 (六年五月) 米山太郎吉先生  
 全 (五年七月) 故手塚長十先生  
 全 (五年六月) 大場 慎六先生  
 全 (五年三月) 小松吉次郎先生  
 全 (五年二月) 宮川 丑作先生  
 全 (五年) 浮田吉太郎先生  
 前助教諭 (五年十一月) 故高木本枝先生  
 前教諭囑託 (八年二月) 故内藤善助先生  
 前學校醫 (五年七月) 故蘆澤三郎先生  
 前書記 (十三年一月) 征矢野茂樹先生  
 内一年半從軍休職  
 全 (八年九月) 安井 正夫先生  
 現 職員

教諭 (七年一月) 西澤静人先生  
 (前任二年一月) 西澤静人先生  
 (通算九年二月) 西澤静人先生  
 學校醫 (十一年九月) 今井碧海先生  
 (前任三年四月) 今井碧海先生  
 (通算十五年一月) 今井碧海先生

紀念運動會の記

凸坊生

針葉樹の間を点綴せる紅葉の色は次第に濃く、水の色は益々清く澄みて、木曾谷の秋色は漸く甜ならんとする十月十六日吾校二十周年記念大運動會は催された。

この日や天氣清朗にして一碧拭へるが如き大空には勇ましく萬國旗が翻り、裝飾部の苦心に成れる檜の葉の大アーチは校門前に突立つて來賓觀客を迎へ實に秋と云へど稀れに見るの好日和であつた。

觀衆は定刻前より續々と押し掛け祝賀式が終つて運動會の始まる頃はもう庭いづばいであつた。

やがてズドン！と競技の演ぜられたる合圖の銃聲は響き渡る、ホワイトのユニフォームは右へ左へと走り廻る、音楽部は盛に囀り立て、今日こそ天晴れ妙技を現はさんとする選手の意氣や將に衝天の慨がある競技はプログラムの進行につれそれからぞれへと進んでゆき、觀衆は次第にその数を増し、拍手歡呼の聲は各所に起る。

會報部員は鈴音勇ましく、或は會報、或は號外、或は漫書とその得意の書筆文筆を現はしたペーパーを彼方此方へと飛ばしてゆき、接待部員は來客の應接に眼をまはして居る、正午近き頃の有様は實にすばらしいものだ、賣店部をのぞいて見れば名譽の月桂冠を得たチャムピオン連は腹をへらして盛に菓子やバクついて居る、一年の徒手体操を殿として午前は閉ぢられた。

この日の呼び物仮装行列によつて午後の幕は開かれ、先づ音楽隊を先登に百數十の校友諸君は思ひ思ひに様々な變装をこらして校庭を二周し、觀衆はその奇想天外なるいでたちと滑稽さには抱腹絶倒のおかしさを禁じ得なかつた様であつた。

更殖戰記

十月二十九日午前十一時六分木曾福島驛發列車は豫て練磨の結果選ばれたる者三十有七名に付添の西澤荒木兩教諭を載せて走つた目指すは更殖の野其處には先發の小貫教諭がまつて居た其の昔甲越兩軍の雄雄を決せし所今日縣下實業學校選手の戦場となる。

彼等が戦績や如何に乞ふ次章を見られよ

柔道部に就て 小松

暈中休暇を終へて九月下旬頃から練習を始められ共毎日練習する人は僅かに二三名時には皆無の日もあつた、殊に聯合マツチに出演する考へのない我々には到底練習の意氣込みがなかつた。

十月中は廿周年記念運動會にて思ふ様な練習が出来なかつたを以て十月月上旬からは全校生徒の應援を得て少からず活氣付いたが遠からず是も止んで十名の選手を出したい考へだつたのも四五名の柔道練習者を見ない斯うして十月十五日頃は六名の選手を出す様に決定されたけれ共依然として緩慢なものだつた斯うした不十分な練習で愈七名の選手諸君は不安を抱き乍ら廿九日は選手一行三十有七名は更級に送られたのであつた此の日は朝から静かな鬱々たる日でも初雪の來た時であつた何だか我等は勝利を裏切られた様な氣がしたそれでも我等は元氣付けて必勝を期して居たのです其の夜は篠井に勝利の夢を結んだ。

明ければ三十日愈今日は奮闘の日だ寒い朝霧も氣にも止らず農學校指して急いだ九時開會の式を終つて先づ我々柔道部は眞先に決戦となつた。

午前中は八校五十六名の選手が戦つた我々の七名の選手は皆よく戦つたけれ共練習の不足は適面に表はれて三名は長商と戦つて犠牲となり二名は引分け二名は危く勝利とはなる長商は縣下中等學校の聯合マツチに

も月桂冠を握つた豪の物だつた。

午後は二名の各校選手の高點試合があつて我々からは稻垣君一人だけ出た君は生來の剛力を發揮して充分に奮闘し最後迄残つたが遂に長商の主將蘆入重雄君に破られた實業學校としては二等で相當の位置を占めた其の日午後二時には試合を終つて他の競技を應援して四時半の汽車で更級を後に再び寂しい木曾に歸つた。

要するに今度の聯合マツチは自信のない練習に加ふるに試合としては最初の事にて少からず氣をもみ落付きのない試合をして居るべき年には大いに努力し充分なる練習と膽力とを養ひ月桂冠を戴いて歸る考へて居ます。

(聯合マツチを終へて)

庭球の部

(香峯生)

二十九日の夕方より降り出したる雨は我等に取つて大打撃で有つた併し秋の天氣は分らぬもの朝方になれば天には一つの雲もなく太陽はきらきらと輝がやいて居た、我々選手は朝七時に宿を立ち出で農學校へと向つた、鐘を合圖に各校の選手は校庭に參集したやがて校長から入場式の挨拶が有つた解散後直ちに競技に移るべき筈なれど昨日の雨の爲にグラウンドは水田の如く庭球のコートは殊に甚だしきもので有つた、試合は十一時より開始されたコートは第一第二と分かれて有つた我々の選手は第二コートに

弓術の部

佐藤生

壁に土を盛つた俄か作りの矢場も一夜の雨に泥の如く邊には泥水が流れて下手な事をしたら矢もダイナシになる程である。

集つた五校は小蠶、長商、南安北部、上伊農及本校にして二十二名の選手であつた。

二三回の小手調べも終り九時半頃に始まつた始めは場慣れもせず加ふるに其の距離も豫定より二間短く(十五間が十三間)に爲に成績不良であつたが然し五回戦の終る頃には相當の成績を得た結果

一等(八點) 長野商業 若林 岩吉  
 二等(七點) 上伊那農 明尾 利夫



◎三等(七點) 本校 佐藤 節守  
 四等(七點) 上伊那農 伊藤西三郎  
 五等(六點) 小縣蠶業 奥戸 由治  
 以下十一等まで五點にて競射をなし本校山  
 岸君は残念乍ら十一番目となり入賞せず宮  
 澤君亦振はず本校選手は他校よりも少く僅  
 か三名師にもつかず儀式も知らずに出場し  
 たのは赤面の至りであつた唯來るべき日を  
 期して今より猛練習をつまんのみ

擊劍の部

伊佐地秀翠

先づ豫選試合に始まる本校選手と他校選  
 手との組合せ次の如し

- (松島) (本校) ○ × (白洲) (本校) ○ ○
- (中澤) (小蠶) × × (塩川) (北農) × ×
- (山田) (本校) × × (原) (本校) ○ ○ ×
- (片井) (北農) ○ ○ (丸山) (南農) ○ ○ ×
- (有賀) (本校) ○ ○ × (小玉) (本校) ○ ○ ○
- (桂川) (長商) ○ ○ × (竹内) (更農) ○ ○ ×
- (伊佐地) (本校) ○ ○ (林) (本校) × ×
- (矢島) (長工) × × (小池) (上農) ○ ○ ○
- (小幡) (本校) ○ ○ (小縣) (本校) ○ ○ ×
- (中山) (下農) × × (中村) (高農) × ×

第一回戦に於ては此の如く五組勝利を得二  
 組敗北し三組引分けなり十二時頃に試合終  
 り晝食となり零時四十分高點試合始まる

第二回戦(各校より二名宛)

- (小玉) (本校) ○ (小縣) (本校) ○
- (中村) (高農) × (降山) (長商) ×

第三回戦

- (小縣) (本校) ○ (小玉) (本校) ×
- (今井) (上農) × (山田) (南農) ○

第三回戦に於て小玉選手敗るる

第四回戦

(小縣) (本校) × (重松) (小蠶) ○  
 第四回戦は兩校主將の試合にして見事な  
 りしも遂に奮闘の甲斐なく本校小縣君敵將  
 をして名をなさしむ已んぬる哉而して本部  
 の成績は第四位にあり

トラック及フールド

兩者にて九名の選手を出したが振はざる  
 こと甚だしく書くにしのびない殊にトラッ  
 クに於けるみちめさ

ありふれを

槇の舎

○高ひかる日のみ子還る外ッ國の地をみ巡  
 りて日のみ子還る。  
 ○あれの夜は暗の寄宿舎教へ子の聲のみ  
 荒みそれとしわがす。  
 ○記念號原稿高く積まれたり訂正など  
 夜の白む頃  
 ○卑怯者無智のまねして我ひとり飯を食み  
 たり茶をすゝりたり。  
 ○流車の我友下りぬ佃女をば道祖神めきて  
 手を引くも見ぬ。  
 ○秋立ちて千草の花のさきにけり心をとじ  
 る朝な夕なよ。  
 ○山々の押し迫りたる木會の谷住みし習へ  
 どひたにわひしや。  
 ○鳴きかはす小雀の群さゆる聲窓をへたて  
 、今し近よる。

り藥石其の効を奏せず前途春秋に富む身を  
 以て本年八月十六日金澤市内病院に於て長  
 逝せらる痛嘆何ぞ勝へん殊に得令聞は漸く  
 六歳の愛兒を擁して其の成人を待たる御同  
 情に不耐就ては吾等相謀り吊慰金を募り故  
 人の靈前に供へ且つ御遺族の慰藉に供し度  
 候に付何卒左記御了承の上御賛同被下度候

- 一、申込期限 本年十一月末日
- 一、拂込先 岐蘇林友會内温井誠一宛  
大正十年九月

- 小藤作四郎
- 小瀧升太郎
- 但馬 廣造
- 宮城 忠藏
- 坪倉藤三郎
- 辻 敬二
- 温井 誠一

第十二回卒業生

諸告に告ぐ

今回飯沼要人君は石川縣石川郡役所に於て  
 勤務中の處不幸にも全縣松任町病院に於て  
 永眠さる就ては吾々學窓を同うするもの相  
 計り同君の靈前に聊なりとも香華を供へ哀  
 悼の意を表し度候間右御賛同の上左記御承  
 知被下度候

- 一、香奠料は各自壹圓位
- 二、出金大正十一年二月十日迄に木曾山林

學校内吉川真夫宛御送附相成度  
 三、芳名及金額は二月號林友に掲載し領收  
 に換ふ

長野縣木曾山林學校創立  
記念會事業募金申込報告書

(第八回申込順)

- 金五圓 宮城 忠藏殿
  - 金五圓 鈴木 繁殿
  - 金貳拾圓 原田 義治殿
  - 金五圓 安井 嘉一殿
  - 金五圓 野澤 博殿
  - 金五圓 高野 金作殿
  - 金五圓 小林 哲三殿
  - 金五圓 山村 克人殿
  - 金五圓 原 潔殿
  - 金五圓 小岩井茂樹殿
  - 金五圓 近森 良材殿
  - 金五圓 月田喜代佐殿
  - 金五圓 八木 愿藏殿
  - 金五圓 加藤 七三殿
  - 金五圓 田中 榮一殿
  - 金五圓 萩原 惠治殿
  - 金五圓 渡邊 知則殿
  - 金五圓 長谷部真一殿
  - 金五圓 岩井 洋治殿
  - 金五圓 山中三十四殿
  - 金五圓 岡西 萬秋殿
  - 金八圓 唐澤 繁夫殿
- 以上
- 金五圓 寺島 俊一殿
  - 金五圓 鷹見 勳殿
  - 金五圓 吉池三九郎殿
  - 金五圓 中垣 英一殿
  - 金五圓 藤原 幾喜殿
  - 金五圓 稻葉 増吉殿
  - 金五圓 林 森殿
  - 金五圓 長崎 信一殿
  - 金五圓 長崎 千万一殿
  - 金五圓 原 英雄殿
  - 金五圓 村上 道信殿
  - 金五圓 勝野 忠三殿
  - 金五圓 下平 通雄殿
  - 金五圓 宮下 武夫殿
  - 金五圓 西村 清志殿
  - 金五圓 齋藤 正雄殿
  - 金八圓 小縣 球次殿
  - 金五圓 青木 重俊殿
  - 金五圓 長谷川房造殿
  - 金五圓 宮下 孝美殿
  - 金五圓 仲谷 馨殿
  - 金五圓 山本 茂殿
  - 金五圓 前野 秀宗殿
  - 金五圓 島田勘太郎殿
  - 金五圓 澤田貞次郎殿
  - 金五圓 和田常次郎殿
  - 金五圓 森 正次郎殿
  - 金五圓 井上 寛一殿
  - 金五圓 矢野 佑殿
  - 金五圓 小池 政人殿

福田君吊慰金募集廣告

母校第一期出身福田友次郎君は卒業後十數  
 年間石川福井の諸縣に歷任せられしが先年  
 官を辭し若越林産株式會社を組織し自ら專  
 務取締役の重任に當り大に畫策に移めらる  
 然るに創業日尙淺くして二豎の犯す所とな  
 る

○堅琴の帆を掻き鳴らす秋風の此世を渡る  
 浮世を巡る。  
 ○快走艇走り浪さんざめく關門の秋の夕日  
 の沈む赤らみ。  
 ○土曜日の午さがり家を出で澤渡の峠踏み  
 なつみたり。  
 ○幼子如き泣きたし落葉ふる夕の音をひた  
 に聞きては。  
 ○紅葉ばに薄ら月影さしそめてみ嶽に降れ  
 る雪牙の渡る。  
 ○はた神鳴りて恐ろし宿訪へば鞍馬の  
 酒の甘し辛かり。  
 ○湯あみして返りを空の三日月に漂ふ雲が  
 心を思ひ。  
 ○小木曾路にいかつち鳴りて雪ふらす紅葉  
 の頃はさびしかりけり。  
 ○更くる夜半落葉かこてり庭にしてさらさ  
 らさらど風を思はせ。  
 ○しんかんと陽は照したりもみちばをその  
 かの數を知らまはほし。  
 ○安井老人の祝歌  
 ○五十歳のその喜の祝にもまた加はらん  
 心ともがな。



金貳圓五拾錢  
金貳圓五拾錢

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

金拾圓

島内先生謝恩金領收報告

合計金四百〇五圓也(外林産物五拾圓也)  
累計金參千六百四拾參圓也  
外ニ林産物五拾圓也

金貳圓

累計金壹百四拾九圓六拾錢也

會 員 動 靜

- 藤枝 茂殿
- 樋口久次郎殿
- 曾我 義郎殿
- 藤田 要吾殿
- 原 彌藏殿
- 中澤浩一郎殿
- 相山 節男殿
- 中島 信敏殿
- 山崎 多門殿
- 今井 欽殿
- 吉村 幸助殿
- 小山田喜十郎殿
- 伊藤 益雄殿
- 高橋 秀惣殿
- 柳澤 得衛殿
- 紺田 孝三殿
- 花村 隼則殿
- 水口 久殿殿
- 田中 泰吉殿
- 日野 清亮殿
- 小澤 安親殿
- 不免 修六殿
- 宮下 武夫君
- 松原松男君 名古屋市堀川通西古渡中越材木店內へ
- 多田慶次郎君 伊豆國湯ヶ島帝林管理局天城出張所へ
- 木村榮一君 兵庫縣應産業部林務課
- 今野啓藏君 印刷局教習所製紙科に入學
- 小藤作四郎君 青森縣下北郡川内町川内小林區署在勤
- 中田穰君 東京下谷區金杉上町四大崎清力
- 金井澄水君 長野縣廳林務課へ
- 紺田孝三君 臺灣中洲竹山郡竹山庄三菱臺灣竹林事務所へ
- 直井利雄君 病氣療養中の處逝去の由哀悼に不堪
- 全井忠雄君 入營中の處病氣の爲現役免除せられ福島町に於て静養中
- 鈴木正雄君 静岡縣榛原郡上川根村千頭帝室林野管理局出張所内
- 松館藤太郎君 青森縣津輕郡喜良市小林區署へ轉勤
- 嶽野利雄君 西筑摩郡讀書村帝室林野管理局三殿出張所官舎へ轉勤
- 由尾忠輔君 全郡葦原出張所官舎へ轉勤
- 青木忠太君 全郡土松出張所へ
- 矢島穰君 岐阜縣大野郡丹生川村第二號

町方保護區官舎へ轉勤

- 草間勝君 先年來北海道釧路土木派出所に在職中
- 金田美行君 帝林局木曾支局福島出張所西野分擔區へ轉勤
- 上田拓二君 岐阜縣郡上郡八幡町分擔區へ轉勤
- 樋口颯君 山林屬たりし處山林技手に任命さる
- 今井眞二君 岐阜縣惠那郡加子母村分擔區へ轉勤
- 河島憲一君 東京市電氣局經理課(自宅東京府下西巢鴨町宮仲三三九二)へ
- 丸山久雄君 帝林局野尻出張所分擔區へ轉勤
- 飯沼要人君 十月六日午後三時石川縣松住院に於て永眠さる哀悼の至り
- 瀧澤兼太郎君 臺灣總督府在職中の處上伊那郡中澤村へ歸省
- 石坂季治君 岐阜縣可兒郡錦津村網場へ轉勤
- 早川嘉一君 木曾支局葦原出張所へ轉勤
- 喜多村明君 帝室林野管理局技手に任命され日義村宮の越分擔區に勤務
- 杉本直君 休職被命自宅飯田町江戸町
- 柘植五郎君 北海道檜山郡江差町帝林局出張所へ轉勤

林友代領收報告

金貳圓也  
金壹圓五拾錢也  
池上 柳三君  
多田慶次郎君

大正十年十一月廿三日印刷  
大正十年十一月廿五日發行

長野縣四筑摩郡福島町(四番番地) 印刷所  
長野縣松本市小柳町(三番番地) 發行所  
長野縣松本市小柳町(三番番地) 印刷所  
長野縣松本市小柳町(三番番地) 發行所

長野縣松本市小柳町(三番番地) 印刷所  
長野縣松本市小柳町(三番番地) 發行所  
長野縣松本市小柳町(三番番地) 印刷所  
長野縣松本市小柳町(三番番地) 發行所

【定價金參錢】